HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ドラッカーとガルブレイス : 予備的概括 ; マネジメントと異端の経済学
著者	春日, 賢; Kasuga, Satoshi
引用	北海学園大学経営論集, 13(1): 1-21
発行日	2015-06-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ドラッカーとガルブレイス

── 予備的概括；マネジメントと異端の経済学 ──

春　日　　賢

はじめに

ドラッカーとガルブレイスについて，世界観と問題意識を概観して同異を明確化し，ひいては両者を比較検討するうえでの主要論点を整理することが本稿の課題である。

ドラッカーが 1909 年－2005 年，ガルブレイスが 1908 年－2006 年と，両者の生存時期はほぼ同じである。それがおおむね 20 世紀をカバーしているがゆえに，しばしば「20 世紀の目撃者」とみなされてきた。そして「20 世紀はアメリカの世紀」であったとすれば，両者はその執筆活動のほとんどすべてをかかるアメリカにおいて行っていた。20 世紀の中心地アメリカにおける彼らは，時代や社会を見据えた屈指の論客であった。しかもいずれも劣らぬ多作家であり，経済・ビジネス関連分野では稀有のベストセラー著作家であった。実際，彼らの言説は時に主たるエコノミストや経営者・実務家を動かし，また政府をも動かした。経済・ビジネス関連分野で，両者はきわめて影響力ある存在でありつづけたのである。

両者の基本的な発想・世界観は，きわめて類似的・親近的なことで知られる。実に日本では長らく両者は，制度学派の一員，大きくは同類としてくくられてきたほどである。ヴェブレンを祖とする斯学派の一員として両者はとらえられてきたのである。

他方で，両者の違いもまた明らかである。ドラッカーは経済学に通暁しながらも「非経済学者」を標榜し，「マネジメントの父」となった。ガルブレイスは正統派経済学の限界・非有効性を指摘しつづけて「異端の経済学者」とよばれながらも，あくまでも経済学者でありつづけた。マネジメントと経済学，これはいかんともしがたい大きな溝であり，乗り越えられない壁といってよい。総体としてみれば，両者のアイデンティティは「マネジメント」と「異端の経済学」に行き着く。以上をふまえて，両者にかかわる主要論点を整理していくことが本稿での課題となる。もとよりあくまでも主要論点の洗い出しと明確化にとどまるものであることを，あらかじめお断りしておかねばならない。

I

まずドラッカーとガルブレイス，両者の生きた時代すなわち 20 世紀初頭－21 世紀初頭を簡単にふりかえってみよう。第一次世界大戦の勃発は物心ついた頃であり，10－30 歳前後の少年期・青年期はちょうど戦間期にあたっている。世界大恐慌は成人した頃で，20 歳代には全体主義の台頭による世界的な緊張を体験していたことになる。第二次世界大戦が 30 歳頃から半ば

にかけてあり，その後の米ソ冷戦体制下で壮年期のほとんどをすごした。この間，軍拡競争，朝鮮戦争，ベトナム戦争，アポロ宇宙計画，オイル・ショック，金本位制の廃止と変動相場制への移行，日本の台頭，多国籍企業の台頭，南北問題から南南問題，グローバリゼーション，湾岸戦争などがあり，ソ連共産主義が崩壊したのは 80 歳を超えてからのことであった。その後，EC 市場統合，アメリカ同時多発テロの発生，中国の台頭などを目の当たりにしながら，21 世初頭に 90 歳代後半で永眠した。この間，原子力その他新しいエネルギー・原材料の発明・利用，大量生産システムの確立，自動車その他輸送技術の飛躍的な発達，インターネットをはじめとする通信技術の飛躍的な発達，コンピュータの世界的普及など，あらゆる科学技術と学問分野における未曽有の発展がみられた。20 世紀のほとんどをカバーしつつ，21 世紀の新たな光景を垣間見ながらドラッカーとガルブレイスは逝ったというところであろうか。総じて，やはり激動の 20 世紀を見つめつづけた目撃者との評価に落ち着く。以下，両者の略歴と主要著書を改めて概観してみる[1]。

ドラッカー（1909－2005）；

ドラッカーは，1909 年オーストリア-ハンガリー帝国下のウィーンで生まれた。ユダヤ系の裕福な政府高官の家で，父は経済学者でオーストリアのフリーメーソンの長（グランド・マスター）でもあったという。官僚，法律家，医師を輩出した家系で，親族には国際法学者のハンス・ケルゼンその他多くの大学教授がいるなど，恵まれた知的環境にあった。のみならず自宅にはトマス・マン，フロイト，シュムペーター，ハイエク，チェコスロバキア建国の父マサリクなど，多くの文化人・教養人が訪れる知的交流にも恵まれていた。おそらくはユダヤ人コミュニティ・サロンだったのであろうが，これらの人々との交流がドラッカーの人格形成に多大な影響を与えたのはいうまでもない。ギムナジウム卒業後，ハンブルク大学法学部に籍をおき，貿易会社や証券会社に就職した。その後，夕刊紙『フランクフルター・ゲネラル・アンツァイガー』の新聞記者および副編集長となり，ヒトラーに直接インタビューする機会も得ている。この頃同時に，編入学していたフランクフルト大学で助手もしており，1931 年に国際法で法学博士号を取得した。

1933 年ナチスの政権掌握後まもなくイギリスに逃れる。その直前に，ユダヤ人シュタールに関する小著を上梓し，反ナチスの立場を表わしている。イギリスでは，ロンドンで投資銀行に勤めていた。1937 年に渡米し，『ワシントン・ポスト』，『ハーパーズ・マガジン』などで執筆にかかわる仕事をするが，『経済人の終わり』（39）刊行を機に名を知られるところとなる。そして雑誌王ヘンリー・ルースからの誘いにより，『フォーチュン』で執筆・編集にたずさわった。その後も『ウォール・ストリート・ジャーナル』や『ハーパーズ・マガジン』，『ハーバード・ビジネス・レビュー』に多く寄稿するなど，有力紙との関係を長らく保ちつづけた[2]。この間，1943 年にアメリカ国籍を取得している。また同年から 18ヶ月にわたって GM の内部調査に従事し，アメリカ国務長官マーシャルの「マーシャル・プラン」の特別顧問も務めた。コンサルタントとしての活動も比較的早くから行っており[3]，フォード，GE，シアーズ・ローバック，IBM などの大企業や，陸軍省，いくつかの NPO にも関与していた。

1942 年からは大学に籍をおきながら，諸々の活動を行っている。在籍した大学は，ベニントン大学（1942 年－1950 年），ニューヨーク大学（1950 年－1971 年），クレアモント大学院大学（1971 年－2003）年である。担当科目は当初多岐にわたっていたが，1950 年頃からマネジメン

トを教えはじめている。所属をジャーナリズムからアカデミズムに転じたわけだが，大学での専門研究者としての軸足は当初，アメリカ政治学会の政治理論部会の委員に就くなどしたことから，政治学においていた模様である。実際,『経済人の終わり』(39) から『新しい社会』(『新しい社会と新しい経営』) (50) にいたるまで，政治学によるアプローチであることがこれら各著書で明記されている。それが『現代の経営』(54) をもって，マネジメントの発明家，経営学者としての勇名をはせていくことになる。とりわけ日本での反響はすさまじく，著書のほとんどがベストセラーとなった。「マネジメントのグル」さらには「グル中のグル」として，その存在は松下幸之助とともにある種神格化された感がある。1966 年には産業経営の近代化と日米親善への貢献により，日本政府から勲三等瑞宝章を授与されている。2002 年には，アメリカで民間人に贈られる最高の勲章「大統領自由勲章」を授与されている。彼の主要著書には，次のものがある（邦訳書は，代表的なものをとりあげている)。

① *Friedrich Julius Stahl; Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung. Tuebingen: Mohr,* (33).（DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳『フリードリヒ・ユリウス・シュタール；保守的国家論と歴史の発展』所収は『DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』第 34 巻第 12 号，ダイヤモンド社，2009 年。）

② *The End Economic Man; The Origins of Totalitarianism,* (39).（岩根忠訳『経済人の終わり』所収は『ドラッカー全集』第 1 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

③ *The Future of Industrial Man; A Conservative Approach,* (42).（岩根忠訳『産業にたずさわる人の未来』所収は『ドラッカー全集』第 1 巻，ダイヤモンド社，1972 年。なお同書は，その後の邦訳タイトル『産業人の未来』として一般に受容されている。）

④ *Concept of the Corporation,* (46).（岩根忠訳『会社という概念』所収は『ドラッカー全集』第 1 巻，ダイヤモンド社，1972 年。なお同書は，上田惇生訳による邦訳タイトル『企業とは何か』として一般に受容されている。）

⑤ *New Society; Anatomy of Industrial Order,* (50).（村上恒夫訳『新しい社会と新しい経営』所収は『ドラッカー全集』第 2 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

⑥ *The Practice of Management,* (54).（上田惇生訳『現代の経営』上巻・下巻，ダイヤモンド社，1996 年。）

⑦ *America's Next Twenty Years,* (56).（中島・涌田訳『オートメーションと新しい社会』所収は『ドラッカー全集』第 5 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

⑧ *The Landmarks of Tomorrow,* (57).（現代経営研究会訳『変貌する産業社会』所収は『ドラッカー全集』第 2 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

⑨ *Gedanken für die Zukunft,* (59).（清水敏充訳『明日のための思想』所収は『ドラッカー全集』第 3 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

⑩ *Managing for Results; Economic Tasks and Risk*–taking Decisions, (64).（野田・村上訳『創造する経営者』所収は『ドラッカー全集』第 4 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

⑪ *The Effective Executive,* (66).（野田・川村訳『経営者の条件』所収は『ドラッカー全集』第 5 巻，ダイヤモンド社，1972 年。）

⑫ *The Age of Discontinuity; Guidelines To Our Changing Order,* (68).（林雄二郎訳『断絶の時代』ダイヤモンド社，1969 年。）

⑬ *Technology, Management & Society,*（70）.
⑭ *Men, Ideas & Politics,*（70）.
⑮ *Management; Tasks, Responsibilities, and Practices,*（73）.（野田・村上監訳『マネジメント』上巻・下巻，ダイヤモンド社，1974 年。）
⑯ *The Unseen Revolution*（→*The Pension Fund Revolution.*）,（76）.（上田惇生訳『見えざる革命』ダイヤモンド社，1996 年。）
⑰ *Adventures of a Bystander,*（79）.（上田惇生訳『傍観者の時代』ダイヤモンド社，2008 年。）
⑱ *Management Case Book,*（77）.（久野桂訳『状況への挑戦』ダイヤモンド社，1977 年。）
⑲ *People and Performance,*（77）.
⑳ *Managing in Turbulent Times,*（80）.（上田惇生訳『乱気流時代の経営』ダイヤモンド社，1996 年。）
㉑ *The Changing World of the Executive,*（82）.（久野・佐々木・上田訳『変貌する経営者の世界』ダイヤモンド社，1982 年。）
㉒ *The Last of All Possible Worlds,*（82）.（風間禎三郎訳『最後の四重奏』ダイヤモンド社，1983 年。）
㉓ *The Temptation to Do Good,*（84）.（小林薫訳『善への誘惑』ダイヤモンド社，1988 年。）
㉔ *Innovation and Entrepreneurship,*（85）.（小林宏治監訳『イノベーションと企業家精神』ダイヤモンド社，1985 年。）
㉕ *The Frontiers of Management,*（86）.（上田・佐々木訳『マネジメント・フロンティア』ダイヤモンド社，1986 年。）
㉖ *The New Realities,*（89）.（上田・佐々木訳『新しい現実』ダイヤモンド社，1989 年。）
㉗ *Managing the Non*-Profit Organization,（90）.（上田・田代訳『非営利組織の経営』ダイヤモンド社，1991 年。）
㉘ *Managing for the Future,*（92）.（上田・佐々木・田代訳『未来企業』ダイヤモンド社，1992 年。）
㉙ *The Ecological Vision,*（92）.（上田・佐々木・林・田代訳『すでに起こった未来』ダイヤモンド社，1994 年。）
㉚ *Post*–Capitalist Society,（93）.（上田・佐々木・田代訳『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社，1993 年。）
㉛ *Managing in a Time of Great Change,*（95）.（上田・佐々木・林・田代訳『未来への決断』ダイヤモンド社，1995 年。）
㉜ Drucker on Asia,（97）.（上田惇生訳『P. F. ドラッカー・中内功　往復書簡①　挑戦の時』『P. F. ドラッカー・中内功　往復書簡②　創生の時』ダイヤモンド社，1995 年。）
㉝ *Management Challenges for the 21st Century,*（99）.（上田惇生訳『明日を支配するもの』ダイヤモンド社，1999 年。）
㉞ *Pete Drucker on the Profession of Management,*（98）.（上田惇生訳『P. F. ドラッカー経営論集』ダイヤモンド社，1999 年。）
㉟ *The Essential Drucker on Individual,*（2000）.（上田惇生訳『プロフェッショナルの条件』ダイヤモンド社，2000 年。）
㊱ *The Essential Drucker on Management,*（2000）.（上田惇生訳『チェンジリーダーの条件』ダイ

ヤモンド社，2000 年。）

㊲ *The Essential Drucker on Society,* (2000).（上田惇生訳『イノベーターの条件』ダイヤモンド社，2000 年。）

㊳ *Managing in the Next Society,* (2002).（上田惇生訳『ネクスト・ソサィエティ』ダイヤモンド社，2002 年。）

㊴ *Advice for Entrepreneurs*, (2004).（上田惇生訳『実践する経営者』ダイヤモンド社，2004 年。）

㊵ *The Essential Drucker on Technology,* (2005).（上田惇生訳『テクノロジストの条件』ダイヤモンド社，2005 年。）

㊶『ドラッカー　二十世紀を生きて』(牧野洋訳，日本経済新聞社，2005 年→『知の巨人ドラッカー自伝』日本経済新聞社，2009 年として文庫化）

㊷『ドラッカー全集』全 5 巻，ダイヤモンド社，1972 年。

第 1 巻　産業社会編―経済人から産業人へ

第 2 巻　産業文明編―新しい世界観の展開

第 3 巻　産業思想編―知識社会の構想

第 4 巻　経営思想編―技術革新時代の経営

第 5 巻　経営哲学編―経営者の課題

これらおびただしい著書群には小説もあるが，大きくは社会論系とマネジメント論系に二分される。執筆における学問的なベースとなっているのは，そもそも政治学であった。ドラッカーが生涯をかけて希求しつづけたのは，「自由」=「責任ある選択」に集約される「望ましい人と社会の実現」にある。したがって執筆のはじまりは社会論であったが，そこからマネジメント論にたどりつき，両方の著書を上梓していくようになる。ただし 80 年代以降の著書は，ほとんどが論文集である。それらはマネジメントを軸に，政治・経済・世界情勢・歴史・哲学・教育などをふくめて，これからの社会を論じるといったスタイルで編まれている。1950 年頃までの初期は社会論，それから 1968 年頃までの中期はマネジメントを編み出した時期であり，主にマネジメント論がきわだっている。以降の後期はマネジメントを彫琢しつつ，それを軸にした論文集を産出していった時期である。さらに生涯の集大成ともいえる『ポスト資本主義社会』(93) 後，逝去するまでを末期とみることもできよう。

これら主要著書群のうち，マネジメント発明の書とされるのが『現代の経営』(54) であり，その決定版として表わされたのが彼の代名詞『マネジメント』(73) である。社会論系のものとしては初期の『経済人の終わり』(39)，『産業人の未来』(42)，『新しい社会と新しい経営』(50)，社会構想の転換となった『断絶の時代』(68)，生涯の集大成ともいえる『ポスト資本主義社会』(93) が代表的な著書といえるだろう。そもそもがジャーナリスティックな筆致であったが，「自由」「望ましい人と社会」の実現を希求する姿勢は一貫しており，なかでも初期社会論の充実度・完成度は出色である。これら『経済人の終わり』(39)，『産業人の未来』(42)，『新しい社会と新しい経営』(50) は「問題の提示とそれに対する解答（回答）」という流れで明確につながっており，三部作ともいえるものである。やがてマネジメントを編み出していくなかで，社会論そのものの構想を改めて「知識社会」として問題提起したのが『断絶の時代』(68) である。以降，売れることをねらった論文集が目立つようになるが，「知識社会」をふくめた「望ましい人と社会」実現への生涯のまとめとして生み出されたのが『ポスト資本主義社会』(93) といっ

てよい。きわめて明快な目的意識のもとに，「文筆家ドラッカー」は生涯その手をとどめることなく執筆をつづけていったのである。

ガルブレイス（1908－2006）；

ガルブレイスは，1908 年カナダのオンタリオ州アイオナ・ステーションという小さな農村に生まれた。スコットランド系移民の裕福な農民の子であった。当初はオンタリオ農業大学で畜産学を学んでいた。同校を卒業後，カリフォルニア大学バークレー校の有給研究生となり，教員生活をスタートするかたわら 1934 年に農業経済学で博士号を取得している。同年ハーバード大学に転じ，1937 年にアメリカ国籍を取得している。ケインズに学ぶべく 1 年間イギリス留学し，1939 年からプリンストン大学に転出している。しかし同大では 2 年間休職して学界から離れ，ルーズベルト政権下で物価統制・民需供給局の物価統制官に就任し，戦時経済政策の立案や大統領スピーチの執筆にかかわっている。1943 年に辞任して，雑誌王ヘンリー・ルース主催の『フォーチュン』の編集委員会に参加したが，そこも休職してふたたび政府の仕事に就くことになる。戦略爆撃調査団の監督官，国務省の経済安全保障政策局局長である。1947 年には『フォーチュン』に戻るものの，翌 48 年にはさらにハーバード大に戻って学界に復帰することになる。ここにおいて産業組織の講座を受けもったことで，これまでの専門たる農業経済学にかえて，本格的な大企業研究に専心し，以降の中心的な研究課題としていくことになる。

その後は経済学者としての研究に軸足をおきながらも，政府の仕事や政治的な活動を積極的に行いつづけ，また講演その他で世間一般に多く登場して勇名をはせていった。その主なものとしては，教え子のケネディを大統領にする政治運動にかかわり，そのケネディ政権下ではインド大使（1961－1963）を務めた。以後も，実にクリントン政権まで大統領に助言を行うなど，民主党の活動に関与していた。一方で『ゆたかな社会』(58) の出版によって，ガルブレイスの名はアメリカのみならず世界的に知られるところとなり，一躍マスコミの寵児となっていった。既存体制ひいては常識というものを「通念」(conventional wisdom) として痛烈に批判しつづける彼の主張は常に物議を醸したが，他にも『新しい産業国家』(67) など世界的な注目を集める著書や論考を数多く生み出しつづけた。1973 年からは 3 年半にわたってイギリスのテレビ番組制作にかかわり，それをまとめたものがこれも有名な『不確実性の時代』(77) となった。

立場はリベラルでそのレッテルは「異端の経済学者」とされながらも，1972 年にはアメリカ経済学会の会長に就任している。その後アメリカ芸術文学アカデミーの会長にも就任しているが，この両方の会長を務めた者は他にいないとされる。1946 年と 2000 年の 2 回，アメリカで民間人に贈られる最高の勲章「大統領自由勲章」を授与されている。戦後アメリカを代表するエコノミストのひとりであったことに間違いはなく，彼自身の巨躯ぶりと業績を重ね合せて「経済学の巨人」との異名もあった。多作ぶりといくつかのベストセラーから，「20 世紀にもっとも読まれた経済学者」ともいわれる。彼の主要著書には，次のものがある（邦訳書は，代表的なものをとりあげている）。

① *Modern Competition and Business Policy* (with H. S. Dennison),(38).
② *An Economic Program for American Democracy* (with R. V. Gilbert, G. H. Hildebrand, Jr., A. W. Stuart, M. Y. Sweezy, P. M. Sweezy, L. Tarshis, J. D. Wilson), (38).
③ *Towards Full Employment* (with M. E. Leeds, R. E. Flanders, L. Filene, H. S. Dennison), (38).

④ *A Theory of Price Control*, (52), 2 th, ed., (80).

⑤ *American Capitalism: The Concept of Countervailing Power*, (52), 2 th, (56).（藤瀬五郎訳『アメリカの資本主義』（第 1，第 2 版訳）時事通信社，1955 年，1965 年。新川健三郎訳『ガルブレイス著作集 1』（第 2 版訳）TBS ブリタニカ，1980 年にも所収。）

⑥ *The Great Crash 1929*, (54), 2 th, ed., (61), 3 th, ed., (72), 4 th, ed., (79), 5 th, ed., (88), 6 th, ed., (97).（小原敬士訳『大恐慌―その教えるもの』（第 1 版訳），経済往来社，1958 年，小原・伊東訳『ガルブレイス著作集 1』（第 4 版訳）TBS ブリタニカ，1980 年他。）

⑦ *Economics and the Art of Controversy*, (55).（大原・太田訳『現代の経済論争』，論争社，1962 年。）

⑧ *The Affluent Society*, (58), 2 th, ed., (69), 3 th, ed., (76), 4 th, ed., (84).（鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』（第 1，2，3，4 版訳）岩波書店，1960，70，78，85 年。第 3 版訳は『ガルブレイス著作集 2』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会―決定版』岩波現代文庫　2006 年。）

⑨ *The Liberal Hour*, (60).（鈴木哲太郎訳『自由の季節』岩波書店 1961 年。）

⑩ *Economic Development in Perspective*, (62).（小原敬士訳『経済開発の展望』ダイヤモンド社，1962 年。）

⑪ *The Mclandress Dimension*, (62).（釜江常好訳『マクランドレス博士の法則』ダイヤモンド社，1971 年。『ガルブレイス著作集 7』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

⑫ *The Scotch*, (64).（土屋哲訳『スコッチ気質』河出書房，1971 年。『ガルブレイス著作集 7』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

⑬ *The New Industrial State*, (67), 2 th, ed.,(71), 3 th, ed., (78), 4 th, ed., (85).（都留重人監訳『新しい産業国家』（第 1，2 版訳）河出書房新社，1968，72 年。都留重人監訳『ガルブレイス著作集 3』（第 3 版訳）TBS ブリタニカ，1980 年他。）

⑭ *How to Get Out of Vietnam*, (67).

⑮ *The Triumph*, (68).（松田銑訳『まぼろしの勝利』日本経済新聞社，1968 年，松田銑訳『小説・アメリカ外交』中央公論社，1979 年。）

⑯ *India Painting*, (with M. S. Randhawa) (68).

⑰ *Ambassador's Journal*, (69).（西野照太郎訳『大使の日記』河出書房，1973 年。）

⑱ *How to Control the Military*, (69).（小原敬士訳『軍産複合体―いかに軍部を抑えるか』小川出版，19670 年。）

⑲ *Who Needs the Democrats and What It Takes to be Needed?.*, (70).（太田・小島訳『アメリカの保守と革新―民主党はよみがえるか』ぺりかん社，1971 年。）

⑳ *A Contemporary Guide to Economics, Peace and Laughter*, (71).（小原・新川訳『経済学・平和・人物論』河出書房新社，1972 年。）

㉑ *La Crise des Societes Industrielles* (avec P. Mendes France, M . Rocard, M. Albert, R. Graudy), (71).（岡山隆訳『「新産業国家」論争』竹内書店，1972 年。

㉒ *Economics and the Public Purpose*, (73).（久我豊雄訳『経済学と公共目的』河出書房新社，1975 年他。久我豊雄訳は，『ガルブレイス著作集 4』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

㉓ *A China Passage*, (73).（加瀬英明訳『中国を考える―ガルブレイス訪中日記』番長書房，

1973 年。）

㉔ *Money: Whence It Came, Where It Went*, (75).（都留重人監修『マネー―その歴史と展開』TBS ブリタニカ，1976 年。『ガルブレイス著作集 5』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

㉕ *The Age of Uncertainty*, (77).（都留重人監訳『不確実性の時代』TBS ブリタニカ，1978 年他。都留重人監訳は，『ガルブレイス著作集 6』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

㉖ *The Galbraith Reader* (edited by Ganbit), (77).（久我豊雄訳『ガルブレイス著作集・別巻』TBS ブリタニカ，1981 年。）

㉗ *Almost Everyone's Guide to Economics*, (78).（鈴木哲太郎訳『ほとんどすべての人のための現代経済入門』TBS ブリタニカ，1978 年。『ガルブレイス著作集 7』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

㉘ *Annal's of an Abiding Liberal*, (79).（都留重人監訳『ある自由主義者の肖像』（『ガルブレイス著作集 8』）TBS ブリタニカ，1980 年。）

㉙ *The Nature of Mass Poverty*, (79).（都留重人監訳『大衆的貧困の本質』TBS ブリタニカ，1979 年。『ガルブレイス著作集 2』（TBS ブリタニカ，1980 年）にも所収。）

㉚ *A Life in Our Times*, (81).（松田銑訳『回想録』（『ガルブレイス著作集 9』）TBS ブリタニカ，1983 年。）

㉛ *The Anatomy of Power*, (83).（山本七平訳『権力の解剖』日本経済新聞社，1984 年。）

㉜ *The Voice of the Poor*, (83).（松田銑訳『ガルブレイス世界を読む―富と英知の使い方』TBS ブリタニカ，1984 年。）

㉝ *Economics in Perspective*, (87).（鈴木哲太郎訳『経済学の歴史』ダイヤモンド社，1988 年。）

㉞ *Capitalism, Communism, and Coexistence* (with S. M. Men'shikov), (88).（中村達也訳『資本主義，共産主義，そして共存』ダイヤモンド社，1989 年。）

㉟ *A Tenured Professor*, (90).（吉田利子訳『ハーヴァード経済学教授』ダイヤモンド社，1991 年。）

㊱ *A Short History of Financial Euphoria*, (90).（鈴木哲太郎訳『バブルの物語』ダイヤモンド社，1991 年。）

㊲ *The Culture of Contentment*, (92).（中村達也訳『満足の文化』新潮社，1993 年。）

㊳ *The Good Society*, (96).（堺屋太監訳『よい世の中』日本能率協会マネジメントセンター，1998 年。）

㊴ *Letters to Kennedy* (98).（谷村武訳『ガルブレイスのケネディを支えた手紙』TBS ブリタニカ，1999 年。）

㊵ *Name*-dropping, (99).（橋本恵訳『20 世紀を創った人たち―ガルブレイス回顧録』TBS ブリタニカ，1999 年。）

㊶ *The Economics of Compassion*, (99).（福島範昌訳『おもいやりの経済』たちばな出版，1999 年。）

㊷ *The Last Warning to the Japanese Economy*, (2002).（角間隆訳『日本経済への最後の警告』徳間書店，2002 年。）

㊸ *The Economics of Innocent Fraud*, (2004).（佐和隆光訳『悪意なき欺瞞』ダイヤモンド社，2004 年。）

㊹『ガルブレイスわが人生を語る』(2004)，日本経済新聞社。

㊺ 『人間主義の大世紀を　わが人生を飾れ』(池田大作との共著) 潮出版社，2005 年。

㊻ 『ガルブレイス著作集』全 10 巻 (別巻をふくむ)，都留重人監訳，TBS ブリタニカ，1980－1983 年。

1. アメリカの資本主義，大恐慌 1929 (50 周年記念版)
2. ゆたかな社会 (第 3 版) 大衆的貧困の本質
3. 新しい産業国家 (第 3 版)
4. 経済学と公共目的
5. マネー　その歴史と展開
6. 不確実性の時代
7. ほとんどすべての人のための経済学入門 (他二編)
8. ある自由主義者の肖像
9. 回想録

別巻．ギャンビット編　ガルブレイス・リーダー

これらおびただしい著書群には小説や美術書もあるが，初期には専門的な経済学者向けのものがメインであった。しかし必ずしも自らの意図を理解してもらえないと悟ったガルブレイスは，専門家にとどまらない一般大衆向けに筆を走らせていくようになったのである。執筆における学問的なベースとなっているのはもとより経済学であるが，それも当初の農業経済学から産業組織論へと大きく転向している。産業組織論をメインとして以降，彼が一貫して追究しつづけたのは，アメリカ資本主義の体系的把握にあるといってよい。そのアプローチは個々の専門領域にとらわれず，それらを全体としてトータルに把握するものであり，また専門的な前提など思考上の既存枠組みについて，現実と照らし合わせてそぐわない場合には，根本的に批判するものであった。これこそ彼の造語による「通念」の打破であるが，時に専門研究のアイデンティティをも否定してしまう主張は，辛辣かつセンセーショナルであったがゆえに常に賛否両論の的であった。

ガルブレイスによれば，これら著書群のうち『ゆたかな社会』(58)，『新しい産業国家』(67)，『経済学と公共目的』(73) が自身の三部作だという。ドラッカーに比した特徴としてあげられるのは，これらをふくむ主著は何度も改訂されているということである。『ゆたかな社会』(58) は決定版をふくめて 5 回，『新しい産業国家』(67) で 4 回，改訂されている。『ゆたかな社会』(58) はガルブレイスの名を世界的に知らしめるベストセラーとなったが，同時に「異端の経済学者」というガルブレイス像を確立するものでもあった。「通念」の打破を掲げる姿勢が，同書において鮮明化されたのである。『ゆたかな社会』(58) と『新しい産業国家』(67) については，ガルブレイスは窓と家の関係になぞらえている。前著が窓から見えたアメリカ資本主義であったとすれば，後著はその窓をふくめた建物全体だというのである。ここでの焦点は，『ゆたかな社会』(58) でのアイディアをきっかけにふくらませた「計画化システム」と表現される大企業体制にある。『経済学と公共目的』(73) については，かかる前二著と基本的に同じ流れにあって，ある意味その終着点だとしている。『新しい産業国家』(67) での「計画化システム」を前提に，どのように対応すればよいのかという，具体的な政策が焦点となっているのである。「産業国家」から「公共国家」への転換を説き，また「新しい社会主義」なる新コンセプトでもって彼は方向性を示している。

かくみるかぎりこの三部作というのは，主にアメリカ資本主義を大企業体制として分析したシリーズとみることができる。そして三著はそれぞれ着想，本論，まとめ・結論と位置づけることができる。ガルブレイスにおいてもっとも有名なのは『ゆたかな社会』(58) であるが，しかしながらそれをもふくんだ内容的充実度・完成度という点で『新しい産業国家』(67) こそが，彼の代表作とみてとることができる。

また三部作ではないが，ガルブレイスを語るうえで『権力の解剖』(83) は外せない。彼の経済学が「経済科学」ではなく「政治経済学」なのは，競争的な市場メカニズムではなくそれらを調整する権力を重視するからにほかならない[4]。市場メカニズムへの根本的な批判を内在する点で彼の経済学は「異端の経済学」だったわけであるが，換言すればそれは「権力の経済学」でもあった。それを表わしているのが『権力の解剖』(83) なのである。

ドラッカーとガルブレイス，両者について，ポイントを改めて整理しておこう。1 歳違いのほぼ同い年で，第二次世界大戦前のおよそ 1930 年代後半からアメリカを舞台に活躍しはじめている。日本でいえば，国民栄誉賞に該当するといわれる「大統領自由勲章」を，いずれも授与されている。同じ『フォーチュン』の編集にたずさわったこともあるが，ドラッカーが 1940 年の 2 か月ほど，ガルブレイスが 1943 年－1948 年の間で断続的にであって，同じテーブルについていたわけではない。ジャーナリズムは両者にとって文章修業の場でもあり，大きな意味を有している。ただしキャリアとしてみれば，ドラッカーは職業としての出自すなわち本来がジャーナリストであったのに対し，ガルブレイスはあくまでも深くかかわった時期もあったというにすぎない。様々な職業を経験してはいるが，基本的には大学に籍を置く研究者として生涯の大半をすごした[5]。

両者ともまれにみる多作家であるが，これは研究者としてみれば異例の豊富な職業経験によるところも無視できない。「文筆家」をもって任じたドラッカーはまさに執筆しつづけた生涯だったが，ガルブレイスについては多作家ぶりを発揮するのは『フォーチュン』後すなわちハーバードで終身在職権を得た 1949 年以降のことである。それまでは著書だと共著の 1 冊のみという状況であった。一躍世に出たのは，ドラッカーが『経済人の終わり』(39)，ガルブレイスが『アメリカの資本主義』(52) であり，時間差がある。

彼らの守備範囲は広く，政治・経済・社会・世界情勢・歴史・教育・小説・美術などにおよんでいる。そもそもの学問的なベースとしてみると，ドラッカーは政治学，ガルブレイスは畜産学から農業経済学にあった[6]。後に専門領域をそれぞれ，マネジメント論，産業組織論へと転じたのである。学問的なキャリア形成上，ガルブレイスにはハーバード大で農業経済学者 J. ブラックという恩師がいたが，ドラッカーにはとくにそのような存在は認められない。実務家としての顔をあわせもっているが，そのフィールドはドラッカーが主に民間，ガルブレイスが主に政府関係という違いをみせている。親近的でありながらも，次元を異にしていたのである。これはそのままマネジメントと経済学の違いに置き換えられるものであろう。

文筆家としてみれば，いずれも多作家でありまた名文家であった。ドラッカーはだれも気づかなかった物事の本質や新しいトレンドを明快に指摘し，歯切れよく読みやすい。ガルブレイスは新たな問題を斬新な枠組み・概念でとらえ，多くの比喩とユーモアを使ってわかりやすく説明する。逆にそれが鼻につくこともあるが，さらに両者は新しいコンセプト提唱や造語の名手でもあった。ドラッカーは「マネジメント」をはじめとして，「リエンジニアリング」「目標管

理」「民営化」「知識労働者」「アウト・ソーシング」などのコンセプトや用語を発見もしくは体系化し普及させた。ガルブレイスは,「通念」「対抗力」「依存効果」「社会的アンバランス」「テクノストラクチャー」などの造語で有名である。これらのなかには,そのまま一般な語として定着してしまったものもあるほどである。

また奇しくも親日家という共通点もある。ドラッカーは日本画の収集家でもあり,大学で日本美術の講義を担当したこともあるほどの知日家であった。日本に関する論文もあるが,そのなかには「日本画にみる日本人」[7]なるものがあるほどである。ドラッカーほどではないにせよ,ガルブレイスも事あるごとに日本に言及し,日本のユニークさを認めて期待する発言をしている。このように彼らがともに日本に好意的であった理由のひとつに,彼らの主張や著書に対する評価が日本では本国アメリカを上回る熱狂ぶりだったことがあろう。日本では両者の著作集が出ているが,ドラッカーはダイヤモンド社から1972年に全5巻[8],ガルブレイスはTBSブリタニカから1980－1983年に別巻を合わせて10巻,となっている。ドラッカーについては,近年の「もしドラ・ブーム」も記憶に新しい。さらにはダイヤモンド社にゆかりある人物が多数かかわって,2005年にドラッカー学会が設立されるほどの人気ぶりである。自らを冠した学会設立にドラッカーはたいへん喜んだようで,亡くなる数か月前にこれを承認している。ところが本国アメリカでドラッカーは,それほどの熱狂の対象ではなかった。隆盛のさなかにあったビジネス・スクールに批判的な姿勢を貫き,他の経営学者とは一線を画しつづけていたこともあったようである。実に1971年以降の余生をすごしたのは,「ドラッカーがいる大学」ということ以外ではその名をあまり耳にしない大学(クレアモント大学院大学)であった。

Ⅱ

ドラッカーとガルブレイスを比較検討するうえで土俵となるのは,制度学派というくくりであろう。斯学派はあくまでもアメリカ経済学の一潮流であって,アメリカ経営学には存在しないとされる[9]。興味深いのは,長らく日本では斯学派をアメリカ経営学の一潮流としても,とらえようとしてきたことである。これは日本の経営学界特有のものといってよい[10]が,ここにおいてドラッカーとガルブレイスは同類とみなされてきたのである。ガルブレイスは自他ともに認める制度学派であるが,ドラッカーは自らを制度学派と認めたことはない。思想的に類似する両者を制度学派の一員とする枠組みは,確かに比較検討するうえできわめて便利であった[11]。制度学派の何たるか,さらにその経営学的意義を論じはじめると,深みにはまるのでここでは差し控える。ただ,企業の制度的把握とその進化論的歴史観,学際知を駆使したトータルな現実把握など基本的なアプローチ,さらにその傾向や全体的なムードという点で,両者に共通の土台は制度学派というよりも,さらに正確にいえばその祖ヴェブレンにあるというべきである。

ヴェブレン(1857-1929)が一貫して追究しつづけたのは,批判的解釈を通じたアメリカ資本主義の超克にある。彼には,「アメリカが生んだ最大のアメリカ批判者」との異名もある。守備範囲は広く哲学・経済学・政治学・社会学・歴史学・生物学など多岐にわたり,しかも文明史的な視点から見据えられるスケールの大きなものである。アメリカが生んだもっとも独創的な社会思想家であり,ミル,マルクス,ウェーバーに比肩するアメリカのグランド・セオリストとして知られる[12]。

ドラッカーのヴェブレンに対する言及はほとんどない。わずかばかりの言葉[13]から,偉大な

思想家のひとりととらえていることが垣間見れるのみである。けれどもドラッカーの自己規定「傍観者」「社会生態学者」は，まさにヴェブレンの全体的なムードを彷彿とさせる。常に第三者としてニュートラルな視角から，人と社会・文明の潮流を冷徹に見据えつづける姿勢は，マージナルマン特有のものだからである。社会の異人ヴェブレン[14]とユダヤ人ドラッカーならではのものなのである[15]。トレンドに対する嗅覚，直観的な鋭さは特定の文化に完全に同化している者にはなしえないものである。ヴェブレンは 20 世紀を見通した予見者としても名高いが，時に未来学者や時代の診断者ともみなされたドラッカーは明らかにその路線にある。

他方，ガルブレイスがもっとも尊敬し，かつ影響を受けたのが，このヴェブレンであるのは自他ともに認めるところである[16]。これほど著名な経済学者のなかで，およそ彼ほどヴェブレンを高く評価する者はほとんどいない[17]。経済学者ヴェブレンは「ヴェブレン効果」「誇示的消費」でいまだその名を残すものの，具体的に検証可能な経済学理論を構築したわけでもなければ，彼が徹底的に批判した既存経済学のオルタナティブを明示したわけでもない。経済学者という枠組みでみるならば，経済思想家ではあっても厳密な意味での経済理論家とはいえない。経済学史における「非正統派の権化」「異端中の異端」ともいえる存在である。ガルブレイスの「異端の経済学者」の異名は，「経済学史上最大の批判者」ともいわれるヴェブレンの視点と立ち位置を受け継ぐものにほかならない[18]。実際，ガルブレイスの現象把握の出発点となる「通念」，そしてそれにもとづく既存システムや常識というものへの批判はヴェブレンのアプローチのうちにあるものである。ガルブレイスのいう「通念」とは「人々に受け入れられることを基礎とした観念の体系」であり，ヴェブレンの「制度」（institution）すなわち「個人と社会の，特定の関係・機能に関して一般化した思考習慣」にかなり通じている。そして彼は事実を解釈する「通念」すなわち既存経済学や常識の保守的硬直性を指摘し，その打破を訴えつづけたのである。新しい現実をとらえる嗅覚という点で，ガルブレイスもまた未来予見者的な部分をそなえていた。かくみるかぎり，ヴェブレンの敷いたフォーマットにおいて 20 世紀に自らの所説を大きく展開していったのが，ドラッカーとガルブレイスとみるのは決して的外れなことではない。両者の共通の土台は，まさにヴェブレンにあるのである。

ヴェブレンは多面的な思想家である。この点も両者に共通するが，それぞれに相違点もある。政治的な方向性として，ヴェブレンはしばしば「アメリカのマルクス」と称されるほど，社会主義色が強い。主著『企業の理論』（04）では「企業の自然な衰退」を主張し，ロシア革命後にはアメリカにおける「エンジニア・ソビエト」なるものを提唱した。ガルブレイスはヴェブレンほどではないリベラル，ドラッカーは対極の保守主義に立つ。ガルブレイスは政府・政党関係の活動に積極的に関与した「政治好き」だったが，ヴェブレンはあくまでも執筆の範囲にとどまる。「自由」を希求したドラッカーが政治的な活動にまったく関与しなかったわけではないだろうが，ガルブレイスほど表立ったものではなかった。NPO など社会活動に力を入れていたが，それを広く政治的なものと解釈すれば，積極的だったともいえるかもしれない。ドラッカーにとって，「自由」実践の場は政治よりもむしろ組織にあった。その軸足が，当初の企業から後期にはとりわけ NPO へとシフトしていったのである。もとよりドラッカーとガルブレイス，いずれもたんなる象牙の塔の研究者ではなかったことは事実である。自らのめざすところに向けて，主体的に行動していく実践的な活動家という点では共通している。これはヴェブレンと異なる点である。ガルブレイスの「異端の経済学者」ぶりは正統派経済学に対して戦闘性が強いが，ヴェブレンも確かに攻撃的で辛辣ではあるものの，ある種むしろ超然とした感があ

る。ドラッカーの傍観者ぶりは実践者ぶりと表裏一体であるが，ヴェブレンは傍観者であることに徹している。

多面的な部分でいえば，毀誉褒貶の多さは三者に共通している。ヴェブレンは経済学者の立ち位置にあるが，そのグランド・セオリストぶりからして厳密な「経済科学」ではなく，「政治経済学」さらには「社会経済学」に属している。「経済学者からは社会学者，社会学者からは経済学者とみなされた」ともいわれ，既成の枠組みにおさまりきらない，とらえどころのない評価が常につきまとう。これは「アメリカのマルクス」と称されつつも，「革新側からは保守的，保守側からは革新的とみなされた」こととも相通じている。多面的なヴェブレンの評価は，見る者の視点・立場によってまったく異なってくるのである。

ヴェブレンほどではないにせよ，このことはドラッカーとガルブレイスにも当てはまる。とくに両者の評価は，世間一般とアカデミズムとでは真逆な点で奇妙な一致をみせている。世間一般からは斯界の専門家として高い評価を受ける一方，それに反比例してアカデミズムからは専門的な高い評価を受けなかった。この温度差，ギャップはあまりにも際立っており，同一人物の評価とは思えないほどである。ドラッカーはとりわけ日本で「マネジメントの父」「ビジネス界に最も影響を与えた思想家」とされながらも，学界でのあつかいはあくまでもジャーナリストであった。ガルブレイスは専門家よりも一般向けの著書を執筆してきたこともあって，やはり学界ではジャーナリストとのあつかいを受けてきた。「経済学者」というよりも，「経済学のトピックをあつかう物書き」であり，せいぜい「経済評論家」とみなされていたのである。「経済学者でない人々にとっては，アメリカ第一の経済学者」との評価もある。ヴェブレン同様，彼の経済学が検証可能な「経済科学」ではなく，検証不能な「政治経済学」だからということも大きい。とはいえ，彼の主張すなわち「本来，経済学は政治経済学たるべき」というのは，核心をついている。彼の経済学が実際の経済政策の立案にかかわっていたという裏づけもある。精緻な理論的水準が高い経済学者であればあるほど，「経済科学」の枷にとらわれてしまう。彼らにとって，経済学の本来あるべき姿を説きつづける「政治経済学者」ガルブレイスは煙たい存在であり，目の上のコブであったろう。しかし他方で，ガルブレイスはアメリカ経済学会の会長に就任している。「異端の経済学者」がアメリカ経済学教育研究の総本山，正統派の牙城の玉座に腰を下ろしたのである。これは，経済学におけるガルブレイスの重要性を知らしめてあまりあることである[19]。

ただしガルブレイスの経済学は「政治経済学」であっても，「社会経済学」かというとやや異なる。これはヴェブレンと違う点であり，ドラッカーとの違いにも通じている。ヴェブレンとドラッカーは社会への強力な視点を有し，ひいては文明史的な視点へとつらなっている。両者は社会思想家・文明論者といえるが，ガルブレイスも若干かぶっているものの，そこまでのものはない。広範な視野と学際的な知識を有しながらも，彼はあくまでも経済学者の枠組みにとどまるのである。これに対し，ヴェブレンとドラッカーは，経済学者や経営学者の枠組みにとどまらない。文明史的な潮流からより長期的な将来を見通す社会思想家・文明論者さらには「未来予見者」としての顔をも持ち合わせていた。ガルブレイスはその時代時代における新たな現実問題をいち早く察知し，それを「通念」すなわち既存経済学や社会常識と突き合せる。そして，それら「通念」では説明不能なものを，彼独自の新しいコンセプトや枠組みをもって明確に説明する，というのが基本的な手法である。その意味では，予見的ではある。カレントな現実をとらえる嗅覚の鋭さを有してはいるものの，ただしその視力でとらえる具体性という点

ではヴェブレン，ドラッカーほどのものはない。

しかしまた一方で，ガルブレイスの「政治経済学」はとくに権力に焦点を合わせている点で，「権力の経済学」ともいわれる。これは，権力の正当性問題にこだわったドラッカーに大きく通じるものでもある。権力の重要性を認識する点で，両者は共通している。ただし，権力のとらえ方・用い方について両者はまったく異なる。ガルブレイスは市場を調整する権力として，国家の役割を重視する。ケインズ主義から離れた後も，このことに変わりはない。広い意味でケインジアンとされるのはこのためであり，彼のアメリカ資本主義は「新しい産業国家」すなわち大企業体制として描かれている。それは，国家の調整を織り込んだ企業群による一元的な社会である。これに対してドラッカーは近代国家・国民国家の限界を指摘し，国家に調整される企業群から成る一元社会から，企業にとどまらない諸組織から成る多元社会を構想する。当初より多元社会を構想していたドラッカーであるが，しかし内実はむしろ企業による一元的な社会にほかならず，後に多元社会へと転向していった感がある。権力によって，一元社会を想定するか，多元社会を想定するかで，両者は大きな違いをみせているのである。これは，ドラッカーとガルブレイスを検討するうえで大きな論点となろう。

ドラッカーとガルブレイスについて，世間一般とアカデミズムでの真逆評価に話をもどそう。アカデミズムでのジャーナリストとの評価はまだいい方で，さらにいってしまえば「雑文家」とまで見下されていたともいえる。これは，両者が学問的な研究者であった以上に，文筆家であった点に由来している。いずれも一般読者を対象に，平易で読みやすい文体を志向していた。ドラッカーはそもそもジャーナリスト出身であったし，ガルブレイスはアカデミズムでの異端ぶりからジャーナリスティックな筆致へと転換していった。たえず世間一般を意識した彼らの執筆は，専門性にとらわれた研究者では描き出しえない世界を大きく提示することができた。ひるがえっていえば，まさに彼らは世間一般が望む本，売れる本を書くことができたのである。それができるだけの筆力をもった「作家」でもあったのである。この点で，ヴェブレンは異なる。彼も確かに新しいコンセプト提唱や造語の名手で名文家であったが，同時に難解きわまりないことでも有名であった。

ところで，ヴェブレンを両者の共通の土台としてみるうえで，不可欠の論点が残っている。技術，そしてテクノクラシーである。「産業技能の状態」（the state of the industrial arts）を制度的進化の決定的要因とみなすヴェブレンは技術決定論にあり，彼の制度史観の軸となっているのは技術史観である。ここにおいて，産業上の技術を司るエンジニアに政治的な実権を委ねようと考えるのはしごく自然であろう。事実ヴェブレンは「エンジニア・ソビエト」を提唱している。彼自身はテクノクラシーの語を用いていないにもかかわらず，テクノクラシーの理論的起点とされるゆえんである。またヴェブレンの企業制度論は「所有と経営の分離」をいち早く指摘し，後の経営者支配論の先鞭をつけるものであった。この経営者支配論とテクノクラシーがあいまって，専門経営者を広義のテクノクラートと解することで，テクノクラシーは「株式会社革命」「経営者革命」などと大きな広がりをみていくのである。

かかるテクノクラシーの受け止め方については，ドラッカーとガルブレイスでかなり異なっている。ドラッカーはその限界をとらえ，「マネジメント」概念を編み出していった。後に「マネジメント」はその担い手としての「知識労働者」概念の着想とあいまって，ドラッカー思想の中核さらにはすべてを集約したものとして結実することになる。ガルブレイスは彼なりの問題意識から「テクノストラクチャー」概念を編み出し，テクノクラシーを蘇生させていった。そ

の際，両者とも経済発展におけるイノベーションの必要性をうったえ，そのための体系的な技術すなわちテクノロジーを重視する点では共通している。これは明らかにヴェブレンからの流れにある。ガルブレイスは，これを「計画化システム」の枠組みによってとらえる。ドラッカーはテクノロジーにとどまることなく，独自の「知識」概念の着想・彫琢へと展開していくことになる。それが総じて「知識社会」とされるものとなったのであった。

Ⅲ

ここでヴェブレンをふくめて，ドラッカーとガルブレイスの評価をまとめておこう。それぞれで重複するのを承知で，あえて単純化して類型化するならば，たとえば以下のようになる。

ヴェブレン；

（1）経済学者としての側面。アメリカ独占資本主義を告発するラディカルな社会経済学者とみなされる。

（2）アメリカ制度学派の祖，さらに広い意味でいえば，アメリカ特有の経済学的思想潮流の起点としての側面。

（3）社会主義的思想家としての側面。「アメリカのマルクス」と称されることもある。

（4）伝統的な価値観や正統派経済学などを辛辣かつ徹底的に批判する懐疑主義者，偶像破壊主義者としての側面。「アメリカが生んだアメリカ最大の批判者」ともいわれる。

（5）ニュー・ディール的社会改良主義の源泉としての側面。アメリカにおけるケインズ経済学受容の思想的土台である。

（6）消費行動・消費社会論のパイオニアとしての側面。「みせびらかしの消費」で知られるように，消費の重要性をいち早く指摘したことが強調される。

（7）社会学者としての側面。経済社会学者として，W. ミルズ，T. パーソンズら，後のアメリカ社会学への影響が強調される。

（8）バーリ＝ミーンズの「所有と経営の分離」論・経営者支配論の理論的先駆者としての側面。経営者革命論やアメリカ経営学との関連が強調される。

（9）テクノクラシーの理論的先駆としての側面。ただし，彼が唱えたのは「エンジニア・ソビエト」であった。

(10)「進化経済学」の祖ないしは大きな起点としての側面。近年さかんとなってきている「進化経済学」なるものをはじめて唱えたことから位置づけられるものである。

(11) アメリカ特有の社会思想家・文明論者としての側面。独自の制度史観さらには技術史観にもとづく文明史的視野におさめられる領域は多岐にわたる。この守備範囲の広さから，ミル，マルクス，ウェーバーらと比肩するグランド・セオリストとみなされる。20 世紀を見通した未来予見者としての評価もある。

(12) ベストセラー著作家としての側面。およそ 11 冊の著書を上梓したが，多くの新コンセプト・造語を駆使した名文家でもあった。なかでも処女作『有閑階級の理論』(1899) は，アメリカ国内で一大ベストセラーとなった。経済関係を軸に形成される社会秩序とそこにおける人間が，生き生きと風刺されている不朽の名作である。

ドラッカー；

（1）経営学者としての側面。経営学を大きく体系化し，「マネジメントの発明者」「現代経営学の父」をもって知られる業績が高く評価される。

（2）経済学者としての側面。もとより彼がめざしたのは「非経済学」であったが，経済学への通暁ぶりは玄人はだしであり，経済学的な分析も行っている。現状に対応し切れていない既存経済学に対しても，事あるごとに批判している。

（3）経営コンサルタントとしての側面。そもそもその開拓者であり，実務界におよぼした多大な影響が強調される。また，セルフ・マネジメントの開拓者として，今日でいえばビジネス・パーソンに対する成功法や仕事術，専門的な職業人としてのあり方など，自己啓発的な分野の先駆者のひとりととらえることもできる。これらを総じて，「ビジネス界にもっとも影響を与えた思想家」と評されている。

（4）「非経済至上主義社会」の建設者としての側面。そのため企業のみならず，長年 NPO やコミュニティ・グループのコンサルティングを無償で引き受け，先導していた。

（5）「自由」の希求者としての側面。徹底した保守主義者を自認し，反全体主義・反共産主義の立場をあらわにする。

（6）世界情勢に関する政治・時事評論家，ジャーナリスト，さらには小説家・雑文家としての側面。

（7）独自の人間論や社会論を展開した社会学者・社会哲学者としての側面。

（8）知識史観ともいうべき独自の文明史観にもとづく社会思想家・文明論者としての側面。「社会生態学者」との自己規定がある。守備範囲の広さとさらにそれらを駆使して大きくまとめあげるところから，「学際的な知の統合者」さらには「現代社会最高の賢人」という評価もある。時代の潮流を把握し，進むべき方向性を指し示した未来予見者的な側面も強いことから，「未来学者」「時代の診断者」とみなされこともある。

（9）近代合理主義の限界を指摘し，それを乗り越えようとするポスト・モダンの旗手としての側面。

（10）ベストセラー著作家としての側面。ドラッカー本人は「文筆家」をもって任じたが，少なくとも 37 の言語に翻訳された数々の著書は世界中で広く読まれた。

ガルブレイス；

（1）経済学者としての側面。第二次世界大戦後においては，アメリカを代表する経済学者のひとりに数えられている。ただしリベラルな政治経済学者・社会経済学者として，その位置づけはあくまでも「異端の経済学者」にある。

（2）制度学派としての側面。とくにヴェブレンとのむすびつきは自他ともに認めるところであり，その広い守備範囲から学際的にアプローチする手法も同様である。

（3）伝統的な価値観や経済学などを辛辣に批判する懐疑主義者，偶像破壊主義者としての側面。これもヴェブレンに通じている。

（4）ケインジアンとしての側面。当初は厳密な意味でのケインジアンとして，アメリカにおけるケインズ経済学を受容させていった張本人のひとりである。後にケインズ主義からは脱しているが，やはりそのむすびつきは無視しえないという部分である。

（5）経済体制論者としての側面。比較的早くから，資本主義と社会主義が相互接近していくと

する体制収斂論を展開していた。

(6) 広く世界情勢に関する政治・時事的な言論を行った政治経済評論家・ジャーナリスト，さらには小説家・雑文家としての側面。

(7) リベラルな政治活動家としての側面。長らく民主党大統領の政治的ブレーンを担い，ケネディ政権下ではインド大使を務めた。

(8) 反戦平和運動家としての側面。ベトナム戦争反対運動，兵器削減のための運動に積極的にかかわった。

(9) テクノクラシーの新たな理論的展開としての側面。彼の造語「テクノストラクチャー」は，すでに一般化してしまっているほど有名である。ちなみにこの点からすれば，彼は技術史観に立っていることになる。

(10) ベストセラー著作家としての側面。30 以上の言語に翻訳された数々の著書は世界中で広く読まれ，「20 世紀にもっとも読まれた経済学者」といわれる。

ここで今一度，ヴェブレンを起点に，ドラッカー，ガルブレイス三者の共通点を端的にまとめておこう。

① 非正統派の立場を貫いていること。マージナルマンもしくは異端者の視点を有し，常に斯界の権威と一線を画している。専門研究におけるトリックスター的な存在を担っているといえるかもしれない。

② 学際的に諸知識を駆使する全体的アプローチをとること。

③ 精緻な分析を展開した理論家というよりも，鋭利な直観で現実を嗅ぎとった思想家であること。未来予見者的な資質も備えている。

④ 技術や知識に注目していること。そしてそれをもとに，独自の歴史観を有していること。

⑤ 筆力に秀でた文章家であること。着想にすぐれ，新たなコンセプトや造語を用いた名文家であること。

およそこの 5 点であろうか。こうしたことから，ドラッカーとガルブレイスはそれぞれの個性を示しつつも，全体的なムードでみるとヴェブレンを彷彿とさせるのである。

Ⅳ

ドラッカーとガルブレイスを思想全体としてとらえると，ヴェブレンの存在は大きい。では，より経済学的な理論でみた場合，両者はどのようにとらえられるだろうか。もとよりドラッカーは経済学者ではない。とはいえ，彼の経済学へのスタンスはあくまでも意図的に距離をおくものであって，斯学への通暁ぶりは玄人はだしであった。いわば経済学に知悉しながらも，否，知悉しえるがゆえに，自身はあくまでも「非経済学者」たることに徹したのである。

両者の時代における代表的な経済学者といえば，ケインズとシュムペーターである。「ケインズか，シュムペーターか」といわれるふたりは，まさに 20 世紀を代表する二大経済学者であった。ドラッカーとガルブレイスが頭角を現した第二次世界大戦前から戦後長らく，大きな影響を有していたのはケインズであった。ドラッカーは，ケインズの講義を聴いた際に人間の

話が出てこないことに違和感をもったと述懐している。これは彼のそもそもの関心がカネやモノをあつかう経済学よりも，ヒトをあつかうマネジメントにあったことを示すエピソードとして語られるものである。彼はケインズに関する論考も著わしているが，そこでの基本的な主張も経済学の限界を強調するものである[20]。

シュムペーターについては，そもそも同じユダヤ人で父親の友人だったこともあり，個人的に親しい関係にあった。実にドラッカーは，事あるごとにシュムペーターとのエピソードを語っている。ドラッカーにとって，人格形成上のキー・パーソンのひとりであったことは間違いない。とりわけ彼の経済学的な思考のみならず，さらにはマネジメントの中核にあるのは，シュムペーターのイノベーション論にほかならない。企業者という主体的な人間的営為によって，一般的な思考習慣すなわち制度を創造的に破壊することで経済社会は発展していくとするものである。否むしろ，シュムペーターのイノベーション論を体現すべくドラッカーが編み出したのがマネジメントだった，といった方がよいかもしれない。彼のマネジメント，とりわけ後期のものの要諦は，制度を創造的に破壊することで経済社会を主体的に発展させていく，ということにあるからである。ドラッカーはまぎれもなくシュムペータリアンである[21]。実にシュムペーターとケインズの生誕 100 年にあたる 1983 年に，ドラッカーはまさに「シュムペーターとケインズ」という論考を著わしているが，前者を「経済学の異教徒」，後者を「経済学の異端」とし，自らが前者の立場にあることを表明するものとなっている[22]。

これに対して，ガルブレイスはどうか。1936 年の『一般理論』出版以後，ハーバードではケインズ台風が吹き荒れており，当初ガルブレイスも熱心なケインジアンであった。自らケインズに学ぶべくケンブリッジ大に留学したほどである。実に『フォーチュン』時代（1943 年－1948 年）の彼の仕事内容は，ジャーナリズムを通して，アメリカにおけるケインズ経済学受容の下地づくりに貢献するものにほかならなかった。後年はケインズを批判する立場に転じたが，国家の役割を重視するなどやはりケインズの影響を無視することはできない。ケインズを批判的に乗り越えようとしている点でみれば，やはり広い意味でのケインジアンといえる。

シュムペーターについては，ハーバード大で断続的ながら（1934 年－1939 年，1948 年－1950 年）同僚であった。後にケインズから脱した後でも，ガルブレイス自身はシュムペーターについてしばしば言及はするものの，それほど高い評価を与えていない。しかしながら，計画化システムやテクノストラクチャーなどに表わされる，独占的巨大企業の登場とその担い手，さらに後述の「新しい社会主義」論など基本的な枠組みや発想には，シュムペーターの強い影響があらわれている[23]。

かくみるかぎり，ドラッカーにおいてはシュムペーターの，ガルブレイスにおいてはケインズとシュムペーターふたりの経済学的な手法を認めることができる。ケインズの有効需要不足に関する認識はヴェブレンの過剰生産ないし過少消費説をベースとするものであり，シュムペーターの創造的破壊の視点もまたやはりヴェブレンの制度的進化の認識ときわめて近似的で関連性が高い。つまり大枠としてヴェブレンを思想的な起点に，ケインズ–シュムペーターからドラッカー–ガルブレイスという流れでみることに変わりはないのである。

そして経済学的にドラッカーとガルブレイスを比較検討するうえでの土俵となるのは，とりわけシュムペーターといってよい。動態的な経済理論とりわけイノベーション論で知られるシュムペーターは，歴史学派にふくまれる。制度的進化を焦点としながらも，それを行為主体による制度の創造的破壊とする点において，ドラッカーとガルブレイスは相通じている。同じ

シュムペーターの枠組みにあるが，しかしそこでの行為主体すなわちイノベーションの担い手という点で，両者は違いをみせている。ドラッカーは「知識労働者」を想定しつつ，最終的には「マネジメント」概念によってとらえようとする。これに対してガルブレイスは，「テクノストラクチャー」による計画化システムすなわち大企業体制において遂行されるとするのである。このとらえ方の先には，資本主義の行く末といった体制論的視点もふくまれている。

こうした体制論について，「資本主義はその成功のゆえに不可避的に崩壊し，社会主義に向かう」とシュムペーターは説いた。ただしここにいう「社会主義」とは一般的な意味とは異なる彼独特のものであって，国家が市場領域をコントロールするものとされる。これはコントロールの程度こそ違うものの，基本的なアイディアとしてはガルブレイスの「新しい社会主義」と同じである。ガルブレイスは国家が市場領域をコントロールするという意味で，資本主義が社会主義化しゆくとした。ひるがえって社会主義もまた資本主義化しゆくとし，体制収斂的な展望を示した。ドラッカーについては，そもそも彼生涯のメイン・テーマが資本主義や社会主義とは異なる「非経済至上主義社会」の希求にあった点で，当初からかかる問題意識を超越していたといってよい。ただし彼の意図する「非経済至上主義社会」と，シュムペーター，ガルブレイスの意図する広義の「社会主義」とがどれほど異なっているのか，あるいは逆に通じるものがあるのか否かというようにみれば，また話は違ってくる。これは今後の検討課題としたい。

おわりに

本稿でのスケッチをまとめておこう。周知のようにドラッカーとガルブレイスは類似的・親近的であるが，その共通の土俵さらには起点といえるのはヴェブレンである。両者の思想的なムードとしてみれば，まさにヴェブレンのそれにほかならないからである。

もとより両者には違いがあり，それが大きな論点となる。まとめると，おおよそ以下の 6 点となろう。

① 社会的な意思決定主体；知識労働者か，テクノストラクチャーか。
② 社会構想；多元社会か，一元社会か（組織社会か，企業社会か）。
③ 国家権力；国家の限界を重視するか，国家の可能性を重視するか。
④ 経済学の方法論；シュムペーターか，シュムペーターとケインズか。
⑤ 政治的方向性；保守か，リベラルか。
⑥ 体制的な展望；非経済至上主義社会か，資本主義と社会主義の体制収斂か。

本稿では，これらのことを確認できた。ただし，あくまでも現時点での大まかな論点にすぎない。立ち入った考察は改めて行うこととしたい。

注

[1] 以下，略歴さらには諸々のエピソードについては，断りのないかぎり，それぞれ次のものによっている。ドラッカーは主に『傍観者の時代』(79)，『ドラッカー　二十世紀を生きて』(2005)（→『知の巨人ドラッカー自伝』(2009)）その他の自著。ガルブレイスは主に『ガルブレイス著作集』全 10 巻（とくに 8『ある自由主

義者の肖像』，9『回想録』)，『ガルブレイスわが人生を語る』(2004) その他の自著，また評伝として R. Parker, *John Kenneth Galbraith: His Life, His Politics, His Economics*, 2005.（井上廣美訳『ガルブレイス　戦う経済学者』上・中・下巻（日経 BP 社，2005 年)。

2 実に『ウォール・ストリート・ジャーナル』に 100 本以上のコラムを書き，『ハーバード・ビジネス・レビュー』には他の誰よりも多く論文を書いたとの指摘もある（Bloomsbury, *Business: The Ultimate Resource*, 2003，ダイヤモンド社編訳『世界を変えたビジネス思想家』ダイヤモンド社，2006 年，204 頁)。

3 ドラッカーによれば，「経営コンサルタント」の名称を初めて用いた者に彼自身もふくまれるようである (『ドラッカー　二十世紀を生きて』(2005))。真偽のほどはさておき，一応指摘しておく。

4 R. Parker，井上廣美訳，前掲邦訳書，第三章。

5 余談ながら，ドラッカーはハーバード大から 4 回ほど誘いを受けたが，いずれも断ったという。2 回はビジネス・スクールから，後の 2 回は政治学や行政学を専門とするケネディ校からのオファーであった。同大の月 3 日間を超えてコンサルタントしてはいけないとの規定で，折り合わなかったという。同じ大学に所属しているからといってガルブレイスと接することになるわけではないが，やはり両者のニア・ミスぶりを感じさせるエピソードである。

6 パーカーは「ガルブレイスの経済学に対する考え方はすべて，恐慌で苦しんでいた農民に出されたニュー・ディールの農業政策が強く影響している。」と指摘し，彼の基本的な世界観がケインズや制度学派ではないことを強調している。R. Parker，井上廣美訳，前掲邦訳書，第三章とくに 120–131 頁。

7 *Song of the Brush*, *Japanese Paintings from the Sanso Collection*（79）が初出とされる。後に『すでに起こった未来』(92）にも転載されている。なおガルブレイスも美術に深い造詣をもっている。インドの絵画についての著書（*Indian Painting*,（68）（共著)）があるほか，既述のように，1982 年にアメリカ芸術文学アカデミーの会員に選出され，1984 年には会長に選出されている。

8 さらにその他に，ダイヤモンド社から「ドラッカー選書」として，1995 年―2004 年に 9 タイトル 10 冊，「ドラッカー名著集」として 2006 年―2008 年に 12 タイトル 15 冊が刊行されている。

9 かのクーンツによるアメリカ経営学の分類でも，制度学派はふくまれていない。この点については，福永文美夫『経営学の進化』（文眞堂，2007 年）を参照のこと。

10 アメリカ経営学の積極的移入につとめた戦後日本の経営学界においては，多様なアメリカ経営学をまとめあげ，科学的定立化を可能とするアプローチとして，制度学派に注目したようである。これに当たるものとして，古川栄一『アメリカ経営学（経林書房，1959 年)，藻利重隆『経営学の基礎』改訂版（森山書店，1962 年）がある。しかしその後の日本経営学の展開を一瞥すれば，かかる試みが成功したとはいいえない。かくみるかぎり日本経営学特有の「制度学派」という枠組みは，ひとつの幻想にすぎなかったのかとの感を禁じえない。もとより「制度学派」の概念規定の多様性もあいまって，いまだ「制度学派」にもとづく部分的な経営学研究も認められはする。

11 既述の藻利重隆による分類にならって，経営学的研究として制度学派をまとめたものに，岩尾裕純編著『講座経営理論 I　制度学派の経営学』（中央経済社，1972 年）がある。同書ではまさにヴェブレンを起点に，その展開としてドラッカーとガルブレイスを同系統で論じている。

12 ロールの言葉「もし比例代表制によって，ひとりのアメリカ人が偉大な経済学者の間に加えられるべく選ばれなければならないとすれば，この目的にとってヴェブレンほどの十分な資格をもつ者はほかにいない」(E. Roll, *A History of Economic Thoughts*, 1942，隅谷三喜男訳『経済学説史』（下）有斐閣，1952 年）はすでに言い尽くされたものであるが，アメリカ経済思想史におけるヴェブレンの存在を見事に言い表している。

13 「マックス・ヴェーバーやソースタイン・ヴェブレンの著作のように，時の試練を経て生き続ける社会分析はすべて，斬新，かつ自明というふたつの特質をもつ。本書『断絶の時代』が，今日なおそのような特質をもっていることは，私の大きな誇りとするところである。」『断絶の時代』1992 年版への序文（上田惇生訳『断絶の時代』ダイヤモンド，1999 年，viii 頁。

14 ただし近年，こうしたヴェブレン像は変わりつつある。これまでヴェブレンはその特異な思想もさることながら，ある意味ではそれ以上に特異な人となりで知られていた。そのもととなっていたのは，ドーフマン *Thorstein Veblen and His America*, 1934.（八木甫訳『ヴェブレン―その人と時代』CBS 出版，1985 年）である。ヴェブレンの人物像および評伝は，ほとんどが同書によるものであった。しかし，これにかわる新たなヴェブレン評伝として，稲上毅『ヴェブレンとその時代―いかに生き，いかに思索したか』（新曜社，2013 年）が上梓されたのである。これまで未公開だった一次資料を徹底的に読み込み，また時代のなかに位置づけ

ることで，同書では新しいヴェブレン像が描き出されている。ヴェブレン研究の画期をなす大著である。

15 民族的な部分のみ強調するつもりはないが，それを無視することの弊害もまた大きいといわざるをえない。ちなみに，ユダヤ人アドルノによるヴェブレン論「ヴェブレンの文化攻撃」(所収は『プリズメン』渡辺・三原訳，ちくま学芸文庫，1996 年）は，自らをヴェブレンに重ね合せて書いた力作として有名である。彼がヴェブレンに共感したのは，まさにマージナルマン特有のものを嗅ぎとったからにほかならない。

16 とくに『ガルブレイス著作集 8　ある自由主義者の肖像』を参照のこと。

17 その他の数少ない例として，日本では宇沢弘文がこれにあたる。『ヴェブレン』岩波書店，2000 年。

18 ただし 1930 年代初めにバークレーに行くまで，ガルブレイスはヴェブレンの著作にふれたことがなかったため，初期の知的ビジョンへの発展には全く関係がないともいわれる。

19 余談ながら，ここでのエピソードが面白い。ガルブレイスによれば，彼の会長就任に猛反対した M.フリードマンこそが結果的にガルブレイスを会長にしてしまった，というのである。フリードマンは「ヴェブレンも会長にならなかったではないか」といったことが，逆にヴェブレンを会長にしなかった過ちを繰り返すまいとする学会の気運をつくりあげてしまったという（『ガルブレイス　わが人生を語る』日本経済新聞社，2004 年)。かくみるかぎりガルブレイスが会長になれたのは，ヴェブレンのおかげだったともいえよう。

20 「ケインズ―魔法のシステムとしての経済学」で 1946 年に書かれたものである。『すでに起こった未来』(93）に再録されている。

21 シュムペーターの主張は，経済学者よりも経営学者が積極的に取り入れていったともいわれる。ドラッカーこそ，まさにその典型であろう。

22 初出は *Forbes* である。その後，『マネジメント・フロンティア』(86)，『すでに起こった未来』(93）に転載されている。

23 ちなみに「シュムペーター＝ガルブレイス仮説」なるものがある。「少数の大きな寡占企業からなる産業は，多数の小企業からなる産業よりも技術的に進歩的である」ということを意味するらしいが，両者の関連を表わすひとつの証左である。